

# 研究結果報告書

## 研究結果

1895年、台湾は日本に割譲された。1920年代以降、進化、文明、文化、モガ（モダンガール）、モボ（モダンボーイ）、大衆、円本といった夥しい日本の流行語が台湾でも流布するようになった。この現象は支配者と被支配者が海を隔てているにも拘わらず、同じレベルの近代化を共有していると云う錯覚をもたらした。しかし、台湾と日本は流行語を共有しているものの、両者の文化、政治状況、社会、世情の相異によって、その発生背景や時代的意味合いは、必ずしも一致するものではなかった。

そもそも流行語は、一部の知識階層の中だけで使われるものでもなく、期間、地域的にも年代的にも広い範囲で共感的に使用されることを前提にしている。流行語の発信媒体が言葉である以上、教育の普及、つまり単一言語の表記の固定化、規範化、標準化を前提条件としており、更には、言文一致による文体の完熟化という均質的近代化の作業が必要とされる。

ところが、台湾に目を転じてみると、進化、文明、大衆といった用語は日本語のメディアだけではなく、漢文雑誌及び漢文欄にも見られる。さらに台湾の低層社会で流行していた伝統文化、「唸歌仔」（*liā m-koa-á*）という台湾話文による民間芸能にも浸透していた。台湾の流行語現象は、日本のように国家による単線型の言語ルートではなく、複線型の言語ルートを媒介とし、三種類のリテラシーの協同作業によって形成されていた。換言すれば、異なる言語の「小衆」を接ぎ合わせて一つの「大衆」になっていたのである。そして異なる三種類のリテラシーの接着剤は漢字、つまり「同文」である。

台湾で流行語化した言葉は全て漢語である。例えば、同じ字形としての「進化」であるが、日本語の読み方は *Shinka* であり、中国白話文の場合は *JINHUA* と発音する。そして台湾語になると、*tsin-hua* となる。つまり「同文不同調」——読み方、音声はそれぞれ違うが、字形は同じである。

台湾では、領台当初から日本語を中心とした「同化」政策が積極的に推進されていた。それにも拘わらず、日本の流行語は20年代までは殆ど台湾に流入しなかった。30年代になると、知識階層のモガ、モボが「黒猫」（*oo-niau*）、「黒犬」（*oo-ká u*）と在地化され、庶民の世界にも浸透していった。こうした変遷の過程から、「同文」が台湾人の異なる階層、地域、教育の壁を取り除き、一つの言葉や概念を共有させ、社会に徐々に浸透していったことが判るのである。

厳密にいうと、台湾の場合は流行「語」というより、流行「文」といったほうが正確であろう。台湾の流行語現象を近代化の表象と見るよりも、「同文」がもたらす東アジアの植民地支配が生み出した特異な文化現象として捉える眼差しが必要である。

## 研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

- 1、「郷土文学の声と大衆」, 陳培豊, 「音盤を通してみる声の近代: 台湾・上海・日本で発売されたレコードの比較研究を中心に」, 2012年10月8日, 大阪日本民族博物館主催。
- 2、「『歌を聴いて字を識る』: 日本統治下の台湾歌謡と文芸大衆論争」 陳培豊, 「文學與影像媒體—台日工作坊」, 臺灣大学、日本大学共催, 2013年12月27日, 臺灣, 臺灣大學臺灣文學研究所。

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

- 1、「聽歌識字創新文: 做為識讀工具的臺語歌謡」, 陳培豊, 『思想』第24期(2013年10月), 頁77-99。
- 2、「以『同文』縫接而成的大衆: 從流行語來看日治時期臺灣的大衆」, 陳培豊, 『臺灣史研究』, 2014年, 12月。(予定)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

1. 『台湾の流行歌、社会文化、政治』 陳培豊、日本・三元社、2016年(予定)